あとがき

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17854

あとがき

シンポジウム当日に各講師からお話しいただいた内容は上のとおりである。若干表現を改めたり、言葉を補うなどの調整を各自行っているが、本報告書を作成するに当たり、写真を含む参考資料や補注も付け加えて、より読みやすくする工夫を心掛けた。最後に、藤島館長の評言との重複を恐れず、各講演の要点や意義を整理して、本シンポジウムのまとめとしたい。

西村は、本事業の連携先、金沢市による「無形文化遺産保護」の事例として、昭和 25 年の「加賀宝生」の金沢市記念文化財指定を取り上げ、その指定理由書を手がかりに「加賀宝生」という言葉の意味やその実質を明確にすることをめざした。２巡目の発言は、20 数年来、金沢大学宝生会の顧問を務めて、年々会員が減少する様子を見ていることが背景にある。「継承の危機」の認識は金沢能楽会でも共有され、現代「加賀宝生」の内部から、種々の分析・提言が行われている。たとえば『金沢能楽会百年の歩み』下巻（2001 年刊）に掲載された能楽師諸氏による座談会を、併せてごらんいただきたい。

諸貫洋次氏からは、国立能楽堂における普及振興のためのさまざまな事業を御紹介いただいた。石川県立能楽堂や金沢能楽美術館でも同種の事業は行われている。異流競演（立合能）や新作能・狂言の上演は魅力的であるが、地方ではその実現までに何かと困難が予想される。むしろ定例公演・普及公演・企画公演等、地方でも可能な、一般的な公演の企画力を高めることが、普及振興にとって大切であると受け止めた。「加賀宝生の魅力」の訴え方には、新しい感覚が必要かも知れない。「世界遺産」論議については、歴史も現在も、名人も素人も、風土（地方）も含めて、総体で「能楽」をとらえたい、と私も考えている。

高桑いづみ氏からは、金沢が育んできた囃子、――とくに金春流の大鼓、観世流の小鼓、葛野・石井両流の大鼓――のそれぞれの特徴や交流のさまを、加賀藩ゆかりの貴重な資料の呈示を交えて解説していただいた。謡と囃子の合わせ方に演者間の解釈の衝突があり、流儀の主張がうかがわれるとのお話を聞いて、能の楽しみ方の幅が広がったと思われた方も多いであろう。芸の変遷を文献でしか追跡できていない私にも新鮮な体験となった。その変遷をこうして資料や実演（その記録）に基づき具体的に把握することが、「変化を認めながら守っていく」という継承姿勢の前提になると感じられた。

渡邊容之助氏からは、長年の御自身の歩みに「加賀宝生」のエポックを重ねる形で、戦前から戦後間もない頃のことを回顧していただいた。幼少年期の鮮やかな記憶は、現代「加賀宝生」の展開を肉声でよみがえらせて、これも文献の限界を補う貴重な証言である。渡

邊氏はまた、日頃、文献の収集や記録の保存を心掛けられ、主宰する荀宝会の会史もまとめておられる。たっぷり時間を割いて、資料とつき合わせながら、聞き書きを編集することも、本事業の課題になり得るのではないかと思われた。風土に育まれ、身体に染み込んだ謡や舞の味わいを、地酒のそれにたとえた発言も強い印象を残したことであろう。

藤島秀隆氏からは、主として加賀藩時代の謡文化の流布について、専門の民俗学的知見や最新の翻刻資料に基づき、明快な御説明をいただいた。藩主主催の大がかりな催し（式楽的催能）に関しては、すでに諸書に多彩な記述を見るが、まさに空から謡が降るように、将軍から藩主へ、藩主から上級武士へ、出入りの商人や中下級武士へ、町人へと、古典芸能のたしなみが社交や出世、商売の手段として流布するさまを、こうした視点や資料から解明し、無形文化遺産の総体を底辺で把握する試みは、近現代の能楽史記述においても踏襲されてよいことに思われた。

以上、各氏のお話の内容を私なりに要約して、粗雑な感想を添えてみた。各氏が本事業に深い理解を示され、惜しみなく御協力くださったおかげで、どうにか報告書作成までこぎ着けることができた。今後も何かと御支援を仰ぎながら、本事業の課題を息長く追求してゆきたいと念じている。

シンポジウム当日は約７０人の来場者があった。同じ時間帯に市内各所でさまざまな文化的行事が開催されていたなか、それぞれ御多用中にも関わらず来場されて、熱心に御聴講くださった方々、そして宣伝に努めてくださった金沢大学日中無形文化遺産研究会構成員各位に、厚くお礼申し上げる。当日の会場運営は、全面的に金沢市のお世話になった。とりわけ金沢能楽美術館の皆様には、準備段階から館を挙げてお力添えをいただいた。心からの感謝と共に、本事業の推進のため、引き続いての御協力をお願い申し上げる。

（西村　聡）